

8月自然を語る会

『生物と無生物のあいだ』を読む 1章から7章

日時：2021年8月21日

場所：飯田橋ボランティアセンター＋zoom

担当：鈴木善次さん

10月9日に関東フォーラムでは福岡伸一さんの講演会を予定している。その準備もかねて、『生物と無生物のあいだ』（福岡伸一著 講談社新書）を8月と9月の2回をかけて読み進むことになった。

まず、著者はこの本で何を伝えたかったのか？という話から。今、目の前に生物と無生物があるとする（例えば貝と石など）。私たちは瞬時に、どちらが生物か見分けることができる。その時私たちはどこを見て判断しているのだろうか？そもそも生命とは何だろう、という問題意識で本書は始まっている。確かに、考えてみれば不思議だ。

前半の今回は生命の科学の歴史。病気は細菌によると思われ、一生懸命病原菌を探していた時代から、細菌よりもずっと小さい病原性物質が見つかり、ウイルスと名付けられた。電子顕微鏡が現れてやっとその実態を見ることができるようになった。また、遺伝子はタンパク質だと思われていたが、実は核酸であった。二重らせん構造モデルは1953年に発表されたそうで、まだ70年も経っていない。現在の遺伝子科学を考えると科学のスピードに驚く。そのカギを握っていたのがPCRだそうだ。コロナで初めて知ったPCRだが、サーファーでもある研究者が、デートの最中に思いついたものだとはい。

（文責 小川）